

倉敷芸術科学大学附属鍼灸ケアセンター活動報告

～創設時から6年間について～

箕口けい子¹⁾・内田 輝和²⁾・遠藤 宏¹⁾

1) 倉敷芸術科学大学生命科学部 2) 鍼メディカルうちだ

(2019年10月1日 受理)

I. はじめに

倉敷芸術科学大学附属鍼灸ケアセンター（以下鍼灸ケアセンター）は倉敷芸術科学大学が本学学生の臨床教育の実践の場、地域住民および施設利用者の健康維持・増進の場として2013年に開設した。本稿では、鍼灸ケアセンターの概要および開所から現在までの来所患者状況について報告する。

II. 鍼灸ケアセンターの概要

鍼灸ケアセンターは倉敷芸術科学大学の附属施設である「ヘルスピア倉敷」の1階に位置している。施術はハードパーテーションとカーテンで区切られている4カ所の施術スペースで行っている。図1のようにすべてのスペースは中央に向かってカーテンがあり、患者と施術者はカーテンを開けて出入りする。各スペースには電動施術ベッド、丸椅子、脱衣籠、ゴミ箱、空気清浄器、胸枕、足枕、バスタオルが常設されている。施術に使う鍼や灸および施術時の消毒用品、鍼通電低周波治療器などは保管スペースの戸棚にあるため、施術する際に、必要な備品をワゴンに載せて各スペースへ移動させている。

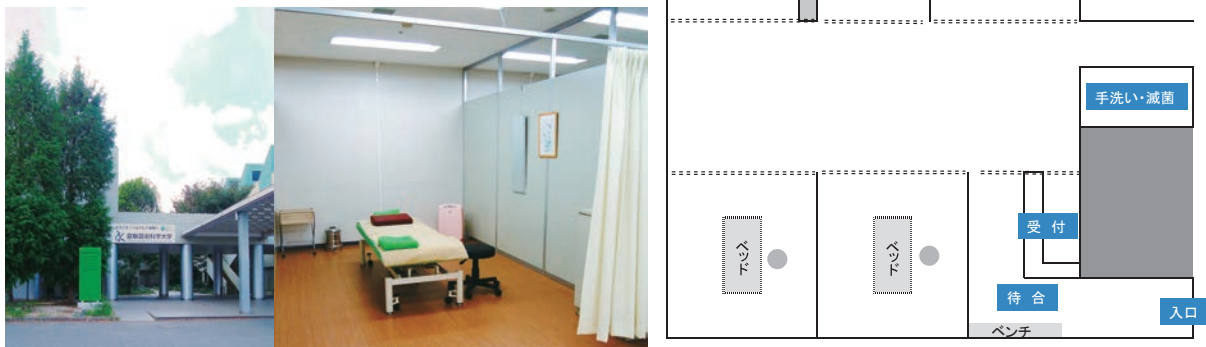


図1. 鍼灸ケアセンター外観、施術スペース、見取り図

鍼灸ケアセンターは大学教員が職員（保健所に登録済みの鍼灸師）を兼任して所属している。現在（2019年9月）は所属職員が1人、業務は火曜日の午前9時～午後5時まで行っており、大学休業日と特定の大学行事日には休診としている。開設当初は所属職員3人、業務は火曜日、木曜日、月の第3金曜日を開所日としていたが、所属職員の減少に伴い現在では1週間に1日の開所となっている。原則として予約による施術を実施しているが、患者の受け入れは可能な限り行っている。また、現在は施術所運営に関わるすべての業務を担当の所属職員1人が行っている。

Ⅲ. 開所から2019年3月までの来所患者状況

1. 患者数・患者所属・利用回数

集計対象期間における年間施術日数、初診患者数、再診患者数を図2に示す。施術日数は470日（年間平均78.3日）、初診患者数は計132人（年間平均22人）、再診患者数は計1,189人（年間平均198.1人）であった。初年度は患者数が最も多く266人、6年目は170人であった。施術日数も患者数同様、初年度が最も多く98日、6年目が43日であった。再診患者数については、初年度（214人）より、4年目、5年目（220人）のほうがやや多かった。

同じく対象期間における累積患者数と、1年毎の患者の所属を一般患者、職員、教員、学生の4区分で分類したグラフを図3に示す。累積患者数は1,321人（年間平均220.1人）、1年毎に平均して約200人増加している。患者の所属で見ると、教員577人（年間平均96.1人）が最も多く、次いで一般患者410人（年間平均68.3人）で、最も少ないのが学生55人（年間平均9.1人）であった。初年度と6年目を比べると、初年度は一般患者数が最も多く、6年目は教員が最も多い。

また、施術回数と所属の関係のグラフを図4で示す。一般患者、学生の施術回数は、1回から5回が多く、職員は2回から5回が最も多く、次いで21回以上と続き、教員は1回が多いものの、6回から21回以上にも一定数存在している。

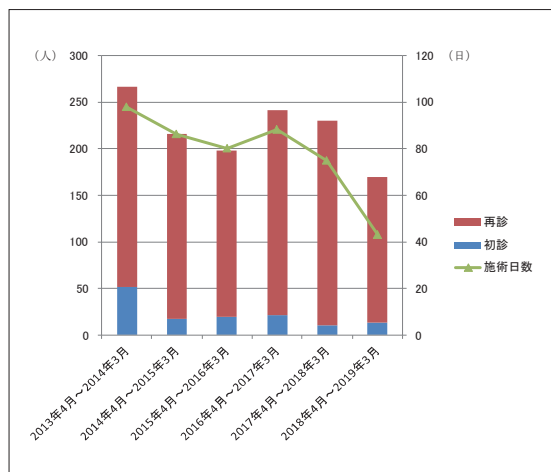


図2. 年間施術日数、初診患者数および再診患者数

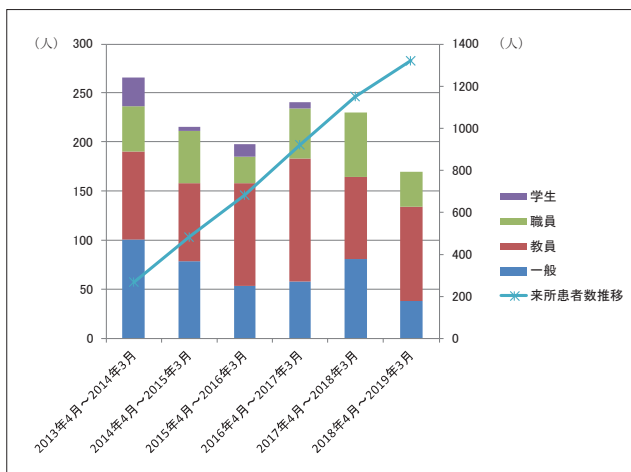


図3. 累積患者数と所属4区分の年間患者数

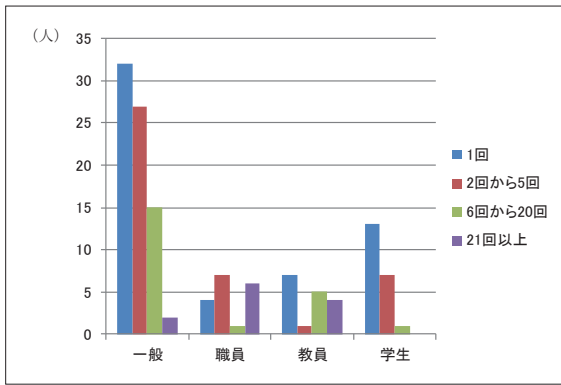


図4. 施術回数と所属4区分の関係

- 図2 施術日数と初診および再診の患者数を示す。
1年目と6年目を比較すると、施術日数が減少し、それに伴い患者数も減少している。
- 図3 累積患者数と所属4区分の年間患者数を示す。
1年目と6年目を比較すると、一般患者は減少しているが、教員は増加している。
- 図4 施術回数と所属4区分の関係を示す。
総患者数132人の施術回数では、1回が多いのが一般32人、教員7人、学生13人、21回以上には、職員6人、教員4人が存在する。

2. 患者構成

(1) 性別

初診患者の性別内訳は男性60人(45%)、女性72人(55%)であり、女性の方が約1.2倍多かった。

(2) 居住地域別

来所患者を居住地域別にみると(図5)、倉敷市内が81人と最も多く、次に岡山県内35人、最後に岡山県外15人となった。

(3) 年齢層別

来所患者の年齢層別分布状況についてみると(図6)、60歳代(27人)が最も多く、次いで、20歳代(23人)、50歳代(18人)、70歳代(18人)と続いた。

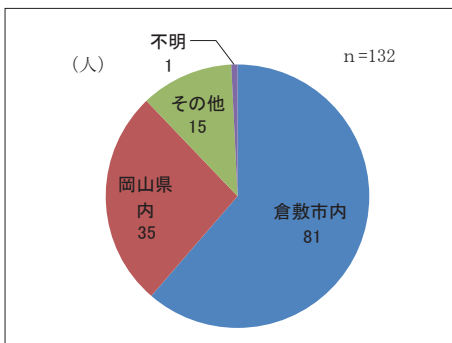


図5. 来所患者の居住地域別内訳

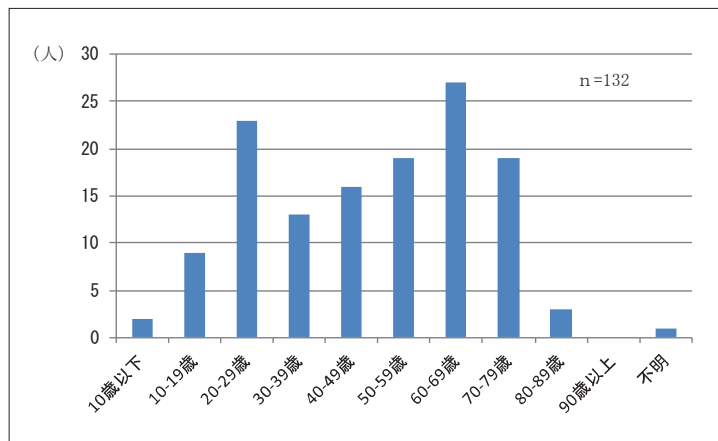


図6. 来所患者の年齢層別分布状況

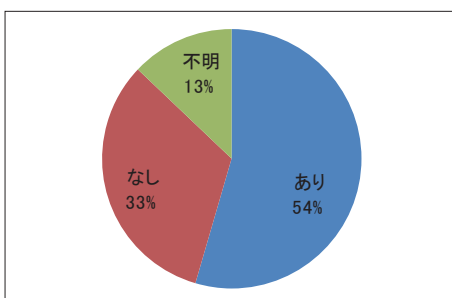


図7. 来所患者の鍼灸経験

- 図5 来所患者の居住地域別内訳を示す。
倉敷市内が最も多く81人、次いで岡山県内35人、その他15人と続く。
- 図6 来所患者の年齢層別分布状況を示す。
最も多いのが60-69歳の27人、次いで20-29歳の23人と続く。
- 図7 来所患者の鍼灸経験を示す。
鍼灸経験がある患者が54%である。

(4) 鍼灸経験の有無

初診時での鍼灸治療経験の有無を図7に示す。54%がこれまでに鍼灸治療の経験があった。

3. 来所患者の主訴

図8は、来所患者の初診時における主訴を部位別に集計した結果を多い順に示した物である。肩部（59件）、腰部（26件）、頸部（20件）が多く、ほとんどは痛み、こり等であった。

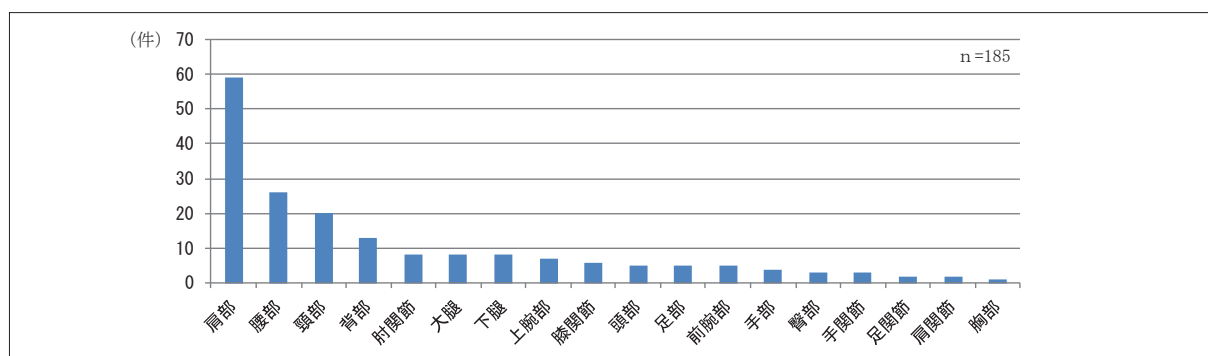


図8. 部位別に見た初診時主訴内訳

IV. 考察

1. 患者数・患者所属・利用回数について

開所から6年間で、年間来所患者数は平均して約200人ずつ増加しているが、1年目と6年目を比較すると6年目が少なくなっている。一番の理由は所属職員減少に伴う施術日の減少があると考えられる。だが、所属職員3人で開所していた1年目の施術者一人当たりの年間患者数は87人であり、所属職員1人で開所している6年目の年間患者数が170人であることから、患者数はむしろ増えている。図3、4から特に増加しているのは、本学の職員、および教員の再診である。この点において鍼灸ケアセンターが本学の福利厚生施設として、教職員の健康増進に一定の役割を果たしていると考えられる。

一般の患者が少ないという事実には、いくつかの理由が考えられる。1つ目は、鍼灸ケアセンターの立地である。鍼灸ケアセンターは大学から車で約5分、徒歩約15分の公共交通手段が無い場所にあり、自家用車かタクシーなどを利用しないと来所が困難である。2つ目は、平日火曜日のみの開所である。平日に休みが得られない方は利用できず、開所時間も最終受付が17時であるため仕事帰りに立ち寄ることもできない。もし、今後一般の患者数増加を考えるならば、平日の開所日および週末の開所日を増設し、最終受付時間を遅くするとよいだろう。また、駅前など交通の便が良い場所に移転するか、スポーツ施設と隣接している現在の立地を生かしてスポーツに対する施術に長けているはりきゅう師や、アスレティックトレーナー、柔道整復師の資格を合わせ持つ施術者（所属職員）を増やすことも効果的と考えられる。

2. 患者構成について

年齢層別の結果で60歳代と70歳代で全体の約1/3を占める。その理由の一つと考えられるのが、鍼灸ケアセンターの開所日時である。日中に時間があるとなると、フルタイムで仕事をしている方は利用が難しい。60歳代、70歳代の方は仕事を引退された方が多く、日中に時間があることで鍼灸ケアセンターを利用されていると考える。

3. 患者の主訴について

他大学の報告と同じく、本学においても肩や腰の痛みが最も多い主訴となった。一般の方の鍼灸対応疾患に対する認識が、肩こり、腰痛であると考えられる。来所された患者に話を聞くと、他の体調不良を抱えている方が多い。そのようなときは鍼灸の適応疾患についてお話しし、「そちらの症状も合わせて診させていただきます」と伝え、対応するように心がけている。

V. おわりに

倉敷芸術科学大学鍼灸ケアセンターの概要と開所から2019年3月までの来所患者の状態について報告した。集計対象期間における鍼灸ケアセンターの来所患者数は、初診患者132人、累計患者数は1,189人であり、来所患者の分類と初診、再診の状況を合わせると、教員、職員の再診が多かった。また、来所患者の主訴については先行事例と同様に肩こり、腰痛などが多かった。

今回、報告を行ったことで鍼灸ケアセンターの状況を細かく把握することができた。教員・職員の再診が多い傾向があることについては今後の研究課題としたい。鍼灸ケアセンターは本来の目的の一つである学生の臨床実習の場として、多くの患者さんに協力いただき実施できている。臨床実習は残り1年半であるが、今後とも鍼灸ケアセンターが鍼灸と一般の方をつなぐ場となるよう努めたい。

謝辞

本報告にあたり、本学を2018年に退職された松田昌子先生のご尽力もいただけたこと、またセイリン株式会社、株式会社山正、株式会社大熊等のご協力もいただけたことに、そしてデータ入力では健康科学科鍼灸専攻22生の栗田晴輝さん、古澤音羽さん両名の手助けに、感謝の意を捧げる次第である。

参考文献

- 1) 本村友昭, 水出靖他「東京有明医療大学附属鍼灸センター報告(第1報)」有明医療大学雑誌 Vol.4: 39-43 2012
- 2) 津嘉山洋, 山下仁他「筑波技術短期大学附属診療所における5年間の鍼灸外来活動報告」筑波技術短期大学テクノレポート No.5: 217-221 March 1998

Report on Activities of the Acupuncture and Moxibustion Care Center in Kurashiki University of Science and the Arts — 6 years since its inception —

Keiko MINOGUCHI¹⁾, Terukazu UCHIDA²⁾, Hiroshi ENDO¹⁾

*1) Faculty of Life Science,
Kurashiki University of Science and the Arts*

2) Harimedical Uchida

(accepted on October 1, 2019)

Abstract

The Kurashiki University of Science and the Arts Acupuncture and Moxibustion Care Center (hereinafter, the Acupuncture and Moxibustion Care Center) was established in 2013 to provide a means for practical clinical education for students of the Kurashiki University of Science and the Arts and to maintain and promote the health of community residents and users of the center. This article provides an overview of the Acupuncture and Moxibustion Care Center and a report on characteristics of patients who have visited the center since its inception.

In 6 years after its inception, the center has been open for consultations on 470 days, a total of 1,321 patients have visited the center. The center accepted 132 new patients and 1,189 repeat visitors, which added up to the same number as the total number of patients. While the majority of the new patients were from the general population, most of the repeat visitors were faculty members of our university. Women and men accounted for 55% and 45% of the patients, respectively. Patients in their 60s represented the most dominant age group, and common chief complaints included pain in the shoulder and lower back.